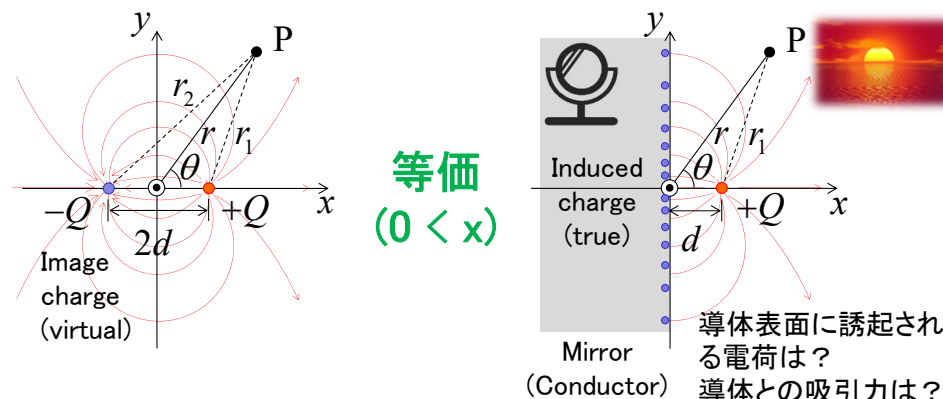


# イメージ法(鏡像法)

1st. 2016/04/01

Lst. 2021/11/15

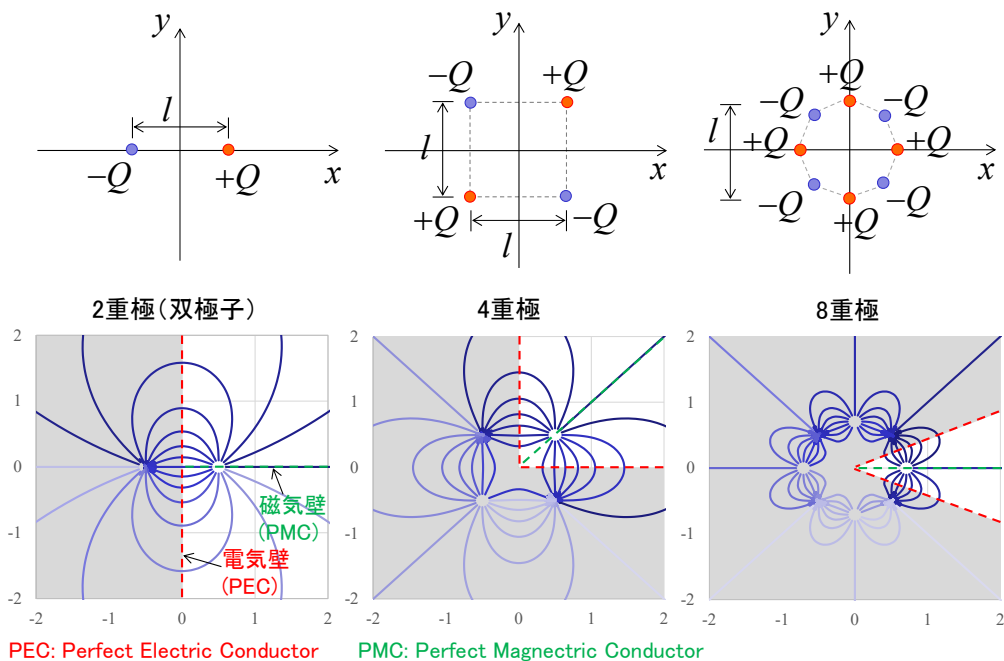
# イメージ法(鏡像法)



等価  
( $0 < x$ )

導体がある場合の電場は、導体を取り払って異符号のイメージ電荷を配置したときの電場と右半分だけは等しい(実際には導体内部には電場は存在しない)。この性質を利用すれば、適切にイメージ電荷を配置することで、導体が電荷の近傍に置かれた場合の電界を簡単に計算できる。これを**イメージ法**または**鏡像法**と呼ぶ。

# 電気力線の描画例



# 無限導体板の電気鏡像法

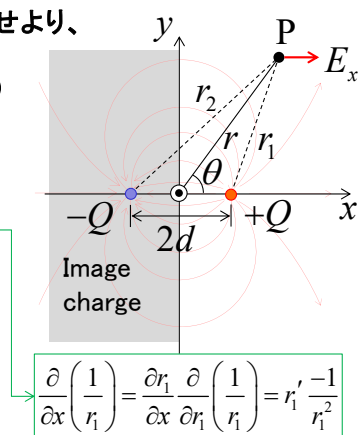
影像電荷を  $-Q$  [C] とすると、P 点の電位は重ね合わせより、

$$V_p = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) \quad (1) \quad \begin{cases} r_1 = \sqrt{(x-d)^2 + y^2} \\ r_2 = \sqrt{(x+d)^2 + y^2} \end{cases} \quad (2)$$

デカルト座標で電界  $E_x$  を求めると

$$\vec{E} = -\nabla V = -\hat{x} \frac{\partial V}{\partial x} - \hat{y} \frac{\partial V}{\partial y} - \hat{z} \frac{\partial V}{\partial z} \quad (3)$$

$$E_x = -\frac{\partial V}{\partial x} = -\frac{\partial}{\partial x} \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) = -\frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) \\ = -\frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{-r_1'}{r_1^2} - \frac{-r_2'}{r_2^2} \right) = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{x-d}{r_1^3} - \frac{x+d}{r_2^3} \right) \quad (4)$$



ただし、

$$r_1' = \frac{\partial}{\partial x} \{(x-d)^2 + y^2\}^{1/2} \\ = \frac{1}{2} \{(x-d)^2 + y^2\}^{-1/2} 2(x-d) \\ = \frac{x-d}{\sqrt{(x-d)^2 + y^2}} = \frac{x-d}{r_1} \quad (5)$$

$$r_2' = \frac{\partial}{\partial x} \{(x+d)^2 + y^2\}^{1/2} \\ = \frac{1}{2} \{(x+d)^2 + y^2\}^{-1/2} 2(x+d) \\ = \frac{x+d}{\sqrt{(x+d)^2 + y^2}} = \frac{x+d}{r_2} \quad (6)$$

# 無限導体板の電気映像法

同様にして電位の重ね合わせより、

$$V_p = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) \quad (7) \quad \begin{cases} r_1 = \sqrt{(x-d)^2 + y^2} \\ r_2 = \sqrt{(x+d)^2 + y^2} \end{cases} \quad (8)$$

デカルト座標で今度は電界 $E_y$ を求めると

$$\vec{E} = -\nabla V = -\hat{x} \frac{\partial V}{\partial x} - \hat{y} \frac{\partial V}{\partial y} - \hat{z} \frac{\partial V}{\partial z} \quad (9)$$

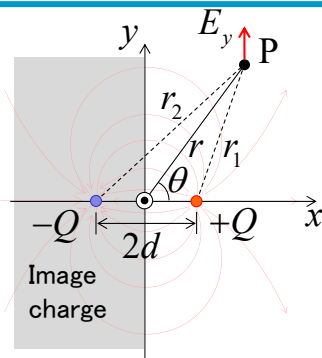
$$E_y = -\frac{\partial V}{\partial y} = -\frac{\partial}{\partial y} \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) = -\frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \frac{\partial}{\partial y} \left( \frac{1}{r_1} - \frac{1}{r_2} \right) \quad (10)$$

$$= -\frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{-r_1'}{r_1^2} - \frac{-r_2'}{r_2^2} \right) = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{y}{r_1^3} - \frac{y}{r_2^3} \right)$$

ただし、

$$r_1' = \frac{\partial}{\partial y} \{(x-d)^2 + y^2\}^{1/2} = \frac{1}{2} \{(x-d)^2 + y^2\}^{-1/2} 2y = \frac{y}{\sqrt{(x-d)^2 + y^2}} = \frac{y}{r_1} \quad (11)$$

$$r_2' = \frac{\partial}{\partial y} \{(x+d)^2 + y^2\}^{1/2} = \frac{1}{2} \{(x+d)^2 + y^2\}^{-1/2} 2y = \frac{y}{\sqrt{(x+d)^2 + y^2}} = \frac{y}{r_2} \quad (12)$$



# 無限導体板の電気映像法

導体表面では $x=0$ を式(2)または式(8)に代入して、

$$\begin{cases} r_1 = \sqrt{d^2 + y^2} \\ r_2 = \sqrt{d^2 + y^2} \end{cases} \quad (13)$$

これを先に導出した(4)と(10)の $E_x$ と $E_y$ に代入すると、

$$E_x = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{y}{r_1^3} - \frac{y}{r_2^3} \right) = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{-d}{\sqrt{(d^2 + y^2)^{3/2}} - \frac{d}{\sqrt{(d^2 + y^2)^{3/2}}} \right) \quad (14)$$

$$= \frac{-Qd}{2\pi\epsilon_0} \frac{1}{(d^2 + y^2)^{3/2}}$$

$$E_y = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{y}{r_1^3} - \frac{y}{r_2^3} \right) = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{y}{\sqrt{(d^2 + y^2)^{3/2}} - \frac{y}{\sqrt{(d^2 + y^2)^{3/2}}} \right) \quad (15)$$

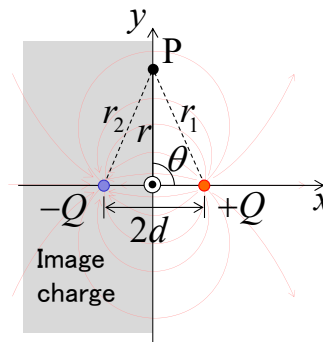
$$= 0$$

即ち、導体表面では電界は垂直成分である $E_x$ のみであり、平行成分の $E_y$ は存在しない。導体表面の電荷密度は $\sigma = \epsilon_0 E$ より、

$$\sigma = \epsilon_0 E_x = \frac{-Qd}{2\pi} \frac{1}{(d^2 + y^2)^{3/2}} \quad [C/m^2] \quad (16)$$

イメージ法より、電荷 $Q$ と導体板の間にはたらく力は吸引力となり、次式となる。

$$F = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{Q^2}{(2d)^2} \quad [N] \quad (17)$$



# 接地導体球の電気映像法1

【例題】接地された半径 $a$  [m]の導体球がある。導体球の中心から距離 $d$  [m]の位置に点電荷 $Q$  [C]を配置したとき、影像電荷 $Q'$ の大きさと位置を求めよ。(教科書 p.35)

【解答】

方針：影像電荷 $Q'$ を配置したとき、半径 $a$ の球面上で常に $V=0$ が成立するようにする。

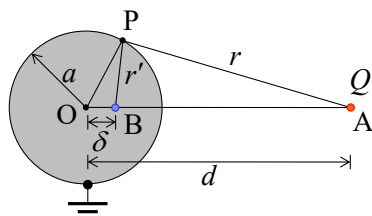
2点A, Bにそれぞれ,  $Q, Q'$ を配置したときのP点の電位は

$$V_p = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \left( \frac{Q}{r} + \frac{Q'}{r'} \right) \quad (1)$$

ここで、 $V_p=0$ となる条件は

$$\frac{Q}{r} + \frac{Q'}{r'} = 0 \Rightarrow \frac{Q}{r} = -\frac{Q'}{r'} \Rightarrow \frac{r'}{r} = -\frac{Q'}{Q} \quad (2)$$

異なる2点からの距離の比が一定値をとる点の軌跡は円(アポロニウスの円と呼ばれる)になる。これが点Oを中心とする半径 $a$ の円と一致すれば、B点に配置した電荷 $Q'$ は $Q$ の影像電荷となる。そのためには、まずOB間の距離 $\delta$ を求める必要がある。



接地されているので、導体球は常にゼロ電位( $V=0$ )になる。

# 接地導体球の電気映像法2

【つづき】右図において余弦定理より

$$\begin{cases} r = \sqrt{a^2 + d^2 - 2ad \cos \theta} \\ r' = \sqrt{a^2 + \delta^2 - 2a\delta \cos \theta} \end{cases} \quad (3)$$

$r'$ と $r$ の比は

$$\frac{r'}{r} = \frac{\sqrt{a^2 + \delta^2 - 2a\delta \cos \theta}}{\sqrt{a^2 + d^2 - 2ad \cos \theta}} = \frac{\sqrt{2a\delta} \sqrt{\frac{a^2 + \delta^2}{2a\delta} - \cos \theta}}{\sqrt{2ad} \sqrt{\frac{a^2 + d^2}{2ad} - \cos \theta}} \quad (4)$$

これが $\theta$ に依らず一定となるには、

$$\frac{a^2 + \delta^2}{2a\delta} = \frac{a^2 + d^2}{2ad} \Rightarrow d(a^2 + \delta^2) = \delta(a^2 + d^2) \Rightarrow a^2(d - \delta) = d\delta(d - \delta) \quad (5)$$

これを $\delta$ について求めると

$$\delta = \frac{a^2}{d} \quad (6)$$

このとき $r'$ と $r$ の比は(4)より

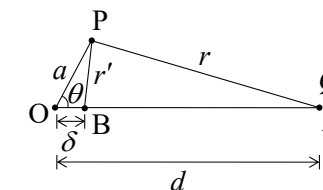
$$\frac{r'}{r} = \frac{\sqrt{2a\delta}}{\sqrt{2ad}} = \sqrt{\frac{\delta}{d}} = \sqrt{\frac{a^2/d}{d}} = \frac{a}{d} \quad (7)$$

先に導出した式(2)より

$$\frac{r'}{r} = -\frac{Q'}{Q} = \frac{a}{d} \quad (8)$$

従って、影像電荷の大きさは

$$Q' = -\frac{a}{d} Q \quad (9)$$



# 接地導体球の電気映像法3

【つづき】簡単のために、P点がOAを結ぶ直線上に存在する場合で考えると、

① Pが球左端にある場合(右図上)、

$$\frac{r'}{r} = \frac{a+\delta}{a+d} \quad (10)$$

② Pが球右端にある場合(右図下)、

$$\frac{r'}{r} = \frac{a-\delta}{d-a} \quad (11)$$

(10)と(11)より、 $r'/r$ は

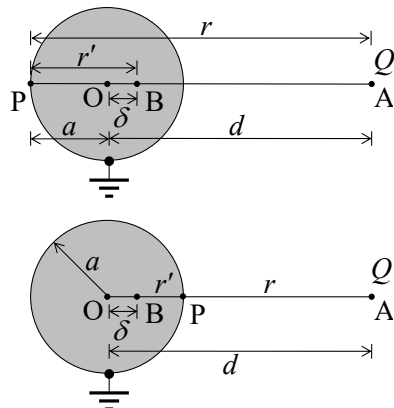
$$\frac{a-\delta}{d-a} = \frac{a+\delta}{a+d} \quad (12)$$

これを $\delta$ について整理すると、

$$\delta = \frac{a^2}{d} \quad (13)$$

(13)を(10)または(11)に代入して整理すると、

$$\frac{r'}{r} = \frac{a}{d} \quad (14)$$



(14)を先に導出した(2)に代入して

$$\frac{r'}{r} = -\frac{Q'}{Q} = \frac{a}{d} \quad (15)$$

従って、最終的に映像電荷の大きさは

$$Q' = -\frac{a}{d}Q \quad (16)$$

としてもよい。

# (補足)アポロニウスの円について<sup>10</sup>

一例として2点をA(1, 2), B(4, 5)とすると、BP/AP=1/2を満たすPの軌跡を求める。

$$\frac{BP}{AP} = \frac{r'}{r} = \frac{1}{2} \quad (1)$$

A点およびB点からP点までの距離は

$$\begin{cases} AP = r = \sqrt{(x-1)^2 + (y-2)^2} \\ BP = r' = \sqrt{(x-4)^2 + (y-5)^2} \end{cases} \quad (2)$$

(1)より

$$r = 2r' \quad (3)$$

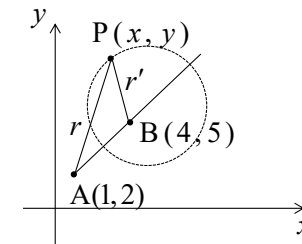
(3)に(2)を代入すると

$$\sqrt{(x-1)^2 + (y-2)^2} = 2\sqrt{(x-4)^2 + (y-5)^2} \quad (4)$$

両辺2乗して整理すると、

$$(x-5)^2 + (y-6)^2 = 8 \quad (5)$$

これは点(5,6)を中心とした半径 $\sqrt{8}$ の円である。



宮腰, 高校数学+α, p.137, 共立出版

# 絶縁導体球の電気映像法1

【例題】接地されず、帯電していない半径a [m]の絶縁導体球がある。導体球の中心から距離d [m]の位置に点電荷Q [C]を配置したとき、映像電荷および導体球の電位を求めよ。(教科書 p.36)

【解答】

方針: 映像電荷Q'を配置したとき、半径aの球面上で常にV≠0を成立させる。

接地した場合の既出問題の答えより、

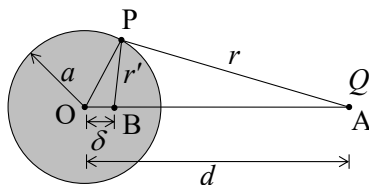
$$\delta = \frac{a^2}{d} \quad (1)$$

の位置に映像電荷

$$Q' = -\frac{a}{d}Q \quad (2)$$

を配置すれば、半径r=aの表面では常にV=0が成立することが分かっている。導体上のVを常に一定値(≠0)にするには、球の中心Oに新たな映像電荷Q''[C]を配置すればよい。このときの球表面の電位は次式となる。

$$V = \frac{Q''}{4\pi\epsilon_0 a} \quad (3)$$



接地されていないので、導体球はゼロ電位にならず、一定値(V≠0)になる。

導体球は絶縁されており、もともと電荷は存在しないので

$$Q'' + Q' = 0 \quad (4)$$

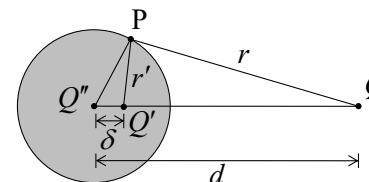
を満たす必要がある。従って、

$$Q'' = -Q' = -\left(-\frac{a}{d}Q\right) = \frac{a}{d}Q \quad (5)$$

# 絶縁導体球の電気映像法2

【つづき】

以上をまとめると、



位置  $\delta = \frac{a^2}{d} \quad (1)$

映像電荷1  $Q' = -\frac{a}{d}Q \quad (2)$

映像電荷2(原点O)  $Q'' = \frac{a}{d}Q \quad (3)$

導体球表面の電位  $V = \frac{Q''}{4\pi\epsilon_0 a} = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0 d} \quad (4)$